

和田牧場の3代目になる

栃木県立那須拓陽高等学校 農業経営科 2年 和田 蓮音

「頼りにしているぞ、頑張れ。」

2年前、祖父に言われた言葉です。

私の家は非農家ですが、祖父と叔父が那須町で酪農を営んでいます。

幼いころから動物が好きで、那須の牧場に行っていました。私の記憶の初めにあるのは、牛舎の中で遊んでいることと、大きなトラクターが大好きだったらしく、叔父の膝の上に乗って、ハンドルの下に見下ろす牧草畑の緑色です。

小学校4年生のころから、本格的にエサやりなど牛舎の仕事を手伝うようになり、牛の魅力にとりつかれました。週末に那須の牧場に行くのが楽しみでなりませんでした。

中学校2年生の夏ごろ、いつものように牛舎の仕事が終わった後に、それまでずっと考えていた思いを祖父と叔父に打ち明けました。

「酪農家になりたい。和田牧場の3代目になりたい。」と。

叔父の家には後継者がいなかったのも、当然のように私が継ぐものだと考えていたのです。しばらく黙っていた叔父に、「お前じゃ無理だ。あきらめろ。」と言われました。今思えば、現在の酪農情勢や将来の不安など、私のことを考えてのことだとわかりますが、その時私は悔しくて涙が止まりませんでした。

私は、酪農家になるという夢をどうしても諦められず、牧場の手伝いを続けました。それだけでなく、牛の勉強、エサの勉強、添加剤の勉強、農業機械の勉強、酪農経営の勉強など、やれることをすべてやりました。その知識をもとに、以前よりも手伝いに行く回数を増やしました。仕事をしている最中に、「何でそんなことを知っているんだ?教えた覚えはないぞ。」と、とても驚かれました。

中学3年の夏、いつものように夜の仕事が終わりと、部屋で休んでいると、祖父と叔父に呼ばれました。私は、「何かな?」と思い椅子に座ると、いつになく真剣な顔をした祖父に、こう伝えられました。

「1年前、お前が牛舎を継ぎたいと言ってくれた時は、正直不安だったけど、嬉しかった…。どうだ、和田牧場の3代目にならないか。」

私は、あまりの嬉しさに言葉を失いました。

「なりたい!」 私は迷わず答えました。そして、祖父に、「頼りにしているぞ、頑張れ。」と、静かに言われました。それは、私にとって一生忘れられない言葉になりました。

それからは、志望高校を農業経営科のある那須拓陽高校に決め、無事、農業経営科に入学することができました。この1年で、いろいろなことを学びました。驚いたのは、畜産は環境問題など、様々な課題を抱えていたことです。今までのように、牛が好きで楽しいだけでは経営し

ていけないことを実感しました。将来那須地域で持続可能な酪農を営むために、学ぶべきことがたくさんあります。また、同じクラスに酪農後継者の仲間ができたことや、牛部の活動でホルスタイン共進会に出場することにより、牛の管理方法やえさの種類など大きく視野が広がりました。これらのことを叔父に話し、他の牧場の良いところを取り入れるようにしています。普通教科の勉強は苦手な所がありますが、一日中牛の話ができることが楽しいです。

現在、酪農は過去最大の危機に瀕しています。新型コロナウイルスの影響で牛乳の消費量が減り、さらに、ロシアのウクライナ侵攻や円安の影響で、3年前に比べて、エサ代は2倍、肥料代も2倍、燃料は3割高といわれるコスト高が襲いかかり、全国の酪農家はコロナ前と比べると約1,700戸減少し、全体の1割以上が廃業しています。

しかし、こんな時だからこそ、私は酪農家になります。酪農家が生き残る道は、自給飼料率の向上と地域密着経営だと思います。叔父の牧場の飼料割合は、粗飼料が55%、濃厚飼料が45%で、19.7ヘクタールの牧草地にデントコーンやライムギを作付けしています。将来は牧草地を増やし、飼料自給率を上げて、世界情勢に左右されない安定した経営を行いたいです。

酪農というと牛乳やチーズの生産が目目されますが、自給飼料を増産するためには広大な農地が必要です。学校の行き帰りに見ている田んぼは、米を作っていないところが増えてきているように感じます。水田にはダム機能や生物を育む機能があり、米を作ることは日本の国土保全や生物多様性の保全につながります。栃木県は飼料米の作付けが多い地域で、飼料米の収量を上げるために肥料を多く入れる必要があり、畜産農家から出る堆肥を有効に活用できます。濃厚飼料として給与できる粳米サイレージの研究も進んでおり、実際に濃厚飼料の一部として給与が始まっています。那須地域は酪農家と米農家が手を取り合う耕畜連携農業ができる地域です。私のクラスメイトにも、お米をたくさん栽培している農家の後継者がいるので、将来はそのような友人と連携して、コントラクターやTMRセンターの規模を大きくしていきたいです。そこで良質なホールクロップサイレージや粳米サイレージなどを作り、地域の耕作放棄地を減らしていきたいです。

牛群は、全頭ゲノム検査を行って、長命・連産を目指します。現在、牧場の乳牛1頭当たりの平均産次数は、2.8産ですが、健康で長生きする方向に牛群改良し、北海道なみの3.3産を目指します。現在の乳質が安定しないという問題に対しては、衛生管理の徹底やえさの品質に注意するなど今からできることをやりながら、将来は牛舎の改築や放牧なども考えていきたいです。

また、私が通う那須拓陽高校では「A2牛乳」を生産しています。A2牛乳とは、牛乳中のタンパク質であるβ-カゼインの分類、A1型とA2型のうちA2型のβ-カゼインのみで構成される牛乳のことです。A2牛乳はおなかにやさしいなど利点も多く、種雄牛評価成績の中にはβ-カゼインの型も表記されています。このA2牛乳を地元の小学校で給食に出すことができれば、牛乳が好きな子供が増えるのではないのでしょうか。

さらに、畜産業からの温室効果ガスの排出については、繁殖性の改善や増体成績など生産

性の改善は、牛からのメタンガス排出削減につながるという報告があります。メタンガスを排出するということは、その分のエネルギーを無駄にしているということであり、今後、飼料や添加剤の研究により生産性を上げながらメタンガス排出抑制が期待できます。牛を牛らしく快適に飼育することが様々な問題を解決する方法であるということがわかりました。

高校に入学する前は、叔父の牧場の牛だけしか見えていませんでしたが、今は酪農を取り巻く社会のことや酪農の未来を考えるようになりました。地域のバイオマスを循環させて有効に活用することは、持続可能な農業につながります。畜産分野は、工業分野よりも早く温室効果ガス排出抑制の目標を達成することができます。

私は、酪農が日本の農業を救うと思っています。牛も人間も地域も、ずっと幸せに暮らせる社会をつくりたいです。

「頼りにしているぞ、頑張れ。」

この言葉を胸に、私は酪農家になります。